

戦災体験談から見た逆境から立ち直る力に関する基礎的分析 Fundamental Analysis of Individual Resilience Based on Narratives of War Experience

○藤本 一雄¹
Kazuo FUJIMOTO¹

¹ 千葉科学大学 危機管理システム学科

Department of Risk and Crisis Management System, Chiba Institute of Science

In order to gain the lessons learned from individual recovery from sudden loss of life or property due to a disaster, individual resilience which is the ability to bounce back from adversity was examined based on the narratives on war experience during World War II in Choshi city, Chiba prefecture. The main results from the analysis on the narratives of 45 people are as follows: 1) Common reasons to bounce back from the adversity (sudden loss of life and/or property) are found as “purposefulness”, “empathy”, and “self-efficacy”. 2) Specific reason to bounce back from the adversity of loss of life (bereavement) is “inheritance of will”, and that from the adversity of loss of property (house burned down) is “euphoria”, respectively.

Keywords : individual resilience, war experience, narratives, adversity, Choshi city

1. はじめに

防災学習において、災害で全てを失った絶望の中から再起をはかった復興体験を伝えることが必要であるとの指摘がある¹⁾。しかしながら、近年、災害に見舞われていない地域では、復興体験そのものが存在しない。災害ではないものの太平洋戦争では、全国の200以上の都市への空襲や戦地での戦闘によって、多くの国民が全てを失った。これらの国民(戦死者の遺族や空襲の被災者)の体験談は、遺族会史(誌)や戦争・戦災体験記などとして戦後多数作られている²⁾。

これらの体験談は、従来、戦争の悲惨さや平和の尊さを訴えるために用いられることが多かったが、戦災で全てを失った個人が再起を成し遂げた側面についてはあまり着目されてこなかったと思われる。そこで、戦災と災害では、多くの相違点はあるものの、これらがもたらす逆境が「多数の個人が生命・財産を突然喪失する」といった点で共通していることに着目して、戦災の逆境から地域の先人がどのように再起したのかを体験談から知ることができれば、将来の大規模災害での逆境に直面したときに個人がいかに再起すればよいのかを考える上での参考になるものと考えた。

以上を踏まえて、本研究では、将来の災害による逆境からの個人の立ち直りに役立てることを目的として、太平洋戦争での戦災による逆境に関する体験談を用いて、それぞれの逆境から個人が立ち直ることができた理由を抽出することを試みた。

2. 使用した資料

太平洋戦争で米軍が日本の各都市に対して行った空襲による被害は、関東大震災と比較して、被災面積は約14倍、被災人口は約6倍、死者・行方不明者は3倍以上(30～50万人)とされている³⁾。また、日中戦争から太平洋戦争までの戦死者(軍人・軍属)は230万人と言われている。

本研究では、多数の空襲を受けた地域の中から、千葉県銚子市を取り上げることとした。銚子市は、1945年の3回の空襲によって、死者380人、焼失家屋約5,000戸の

被害を受けた(図1)。また、銚子市の戦死者は、約2,000人と報告されている。当時の銚子市の人口は約6万人であることから、戦災によって人口の約4%を喪ったことがわかる。このような戦災に関する体験談を後世に残すために、銚子市では、空襲の被災者ら(77人)による『市民の記録 銚子空襲』⁴⁾と戦死者の遺族ら(60人)による『銚子市遺族会 四十周年記念誌』⁵⁾が作られている。

これらの体験談には、戦時中の生活、空襲体験、軍隊生活、終戦後の抑留・引き揚げ、戦後の生活などの様々な逆境に関する体験が綴られている。「逆境」とは、一般に「苦勞の多い境遇」「不運な境遇」「不幸な境遇」と定義されるが、本研究では、戦災によって人命または家屋(あるいは、その両方)を喪失した体験と定義した。そこで、すべての体験談(137人)を読んで、各人の逆境の状態を「人命・家屋の喪失」「人命の喪失」「家屋の喪失」「その他」のいずれかに分類した。また、各人の性別は、氏名や体験談の内容から判別することができたものの、各人の年齢は、明記されていない場合が多く、すべてを特定するには至らなかった。

表1に、逆境の区分ごとの体験談の数(人数)を男女別に示す。表1を見ると、人命または家屋(あるいは、その両方)を喪失した者の体験談は、全体の約6割(87人)を占めていた。そのうち、人命の喪失(60人)は、家屋の喪失(19人)よりもかなり多く、その性別は男性(20人)より女性



図1 銚子空襲による焼失地域⁴⁾

表 1 戦災による逆境ごとの体験談の数

文献	逆境の区分						その他		計	
	人命・家屋 の喪失		人命の喪失		家屋の喪失					
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
『空襲』 ⁴⁾	4	1	0	3	7	12	23	27	34	43
『遺族』 ⁵⁾	1	2	20	37	0	0	0	0	21	39
計	5	3	20	40	7	12	23	27	55	82
	8		60		19		50		137	

(40人)の方が多いことがわかる。これは、戦死者(夫)の遺族(妻)による体験談が、文献 5)に数多く収録されていることによる。

つぎに、これらの体験談を読むと、逆境に関する体験のみで、その逆境からの立ち直りの過程に関する体験が述べられていないものが多数あった。そこで、立ち直りの過程を含む体験談を調べたところ、人命・家屋の喪失：6人、人命の喪失：22人、家屋の喪失：17人の計45人であった。以下では、これらの45人の体験談を用いて、逆境から立ち直ることができた理由についての分析を進めることとした。

3. 分析結果

(1) 立ち直ることができた理由

まず、それぞれの体験談の中から、逆境からの立ち直りに関連する意志(「強く生きようと思った」「決意した」「覚悟した」など)や行動(「生きてきた」「働いた」など)を含む箇所に着目して、その前後の文脈から立ち直ることができた理由を抜き出した。その際、1人の体験談の中に複数の理由が含まれている場合、それぞれを1つの理由として抜き出した。また、外的要因に関する理由は除外して、内的要因に関する理由だけを抜き出した。つぎに、立ち直ることができた理由をカードに書き出し、類似する内容ごとにグループ化し、各グループにタイトルをつけた。立ち直ることができた理由を、逆境の区分(人命・家屋の喪失、人命の喪失、家屋の喪失)ごとに整理した結果を表2に示す。

表2より、立ち直ることができた理由は、「目的意識」「共感」「自己効力感」「意志継承」「幸福感」の大きく5つに分類できた。そのうち、いずれの逆境の区分にも共通する理由は「目的意識」「共感」「自己効力感」であり、特定の逆境の区分だけに見られた理由は「意志継承」と「幸福感」であった。以下では、それぞれについて詳しく述べる。

(2) すべての逆境に共通の理由

「目的意識」は、一般的には“行動の目的に対する明確な自覚”と定義されるものである。その理由を見ると、「体の続く限り働き、子どものために行きぬいてきました」「どんなことがあっても、子どものために強く生きねばならぬ」のように、「子どものために」が13人で最も多く挙げられていた。このことは、逆境からの再起を図る上で、「自分のために」と考えるだけでなく、「他者(誰か)のために」と考えることが重要である可能性を示唆している。その他には、「商売のため」「農地を守るため」「(自分が)生きるため」などが見られた。

「共感」は、一般的には“他人の体験する感情や心的状態、あるいは主張を、自分が全く同じように感じたり理解したりすること”と定義されるものである。その理由の内容は、人命を喪失したかどうかで少し異なっていた。

人命を喪失した者は、「大勢の方々も私と同じように悲しんでいるだろう」「自分ばかりがみじめではない、まだたくさんの方が困っている、強く生きようと考え直した」のように“自分だけが逆境(人命の喪失)に置かれているわけではない”と考えていた。これに対して、家屋を喪失した者は、「自分以上の最大の不幸にあわれた家庭は多数あることを聞き、深く同情する」「戦死されたご遺族のことを思えば、我が家の犠牲くらいで泣いてはなるまいと心をとりのおし」のように“自分よりも過酷な逆境(人命の喪失など)に置かれている人がある”と考える傾向にあった。

「自己効力感」は、一般的には“目標達成のために必要な行動を効果的に遂行できるという確信”と定義されるものである。その先行要因として、「遂行行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「情動的喚起」が挙げられている⁶⁾。今回の体験談からは、代理的体験(「男になったつもりで」)や言語的説得(「人様に喜んでいただける仕事なんだ」と、自分に言い聞かせながら)」が理由として確認することができる。

(3) ある逆境に特有の理由

「意志継承」は、人命を喪失した者(戦死者の遺族)だけに見られた理由である。例えば、「夫の最後の言葉を思う時、どんな苦しみ乗り越えても強く生きねば」「残された2人の子をりっぱに育てるという夫との約束を果たすためにも、がむしゃらに働かねばならないと覚悟しました」などである。この「意志継承」は、災害時の「生きる力」に関する探索的研究⁷⁾での「意志のバトン」に相当すると言える。その例として、本研究と同様に「妻の死を経験し、死に際まで人助けをしていた妻の意志を継ごうと考えた」のように犠牲者の意志(遺志)を遺族が継承する事例がある一方で、「震災後、息子が家業(農家)を継ぐと言って、そのために仕事を再開する意欲が湧いてきた」との事例も見られた⁷⁾。それゆえ、「意志継承」は、人命の喪失を体験した者だけに限定される理由ではない可能性が考えられる。これらの一方で、体験談の中には「私は好きな人がありましたが家を継ぐことになり、家の犠牲になりました」といったネガティブな感情を持つ者もいた。

「幸福感」は、家屋を喪失(空襲により焼失)した者だけに見られた理由である。具体的には、「家は焼けても、家族4人、無事だった私たちは本当に幸せだった」「肉親の誰もが傷を負わず・・・不幸中の幸いであった」のように、空襲による不幸(家屋の焼失)に見舞われたものの、自分だけでなく家族も生き残ったことに対して「幸福感」を感じていた。この「幸福感」は、1940年ロンドン大空襲でのサバイバーの1人である若い女性(空襲によって家屋は壊れたものの、恋人とその両親は無事)の証言「多くの人が亡くなり負傷した夜に、不謹慎かもしれないけれど、わたしの一生であれほど純粋で一点の曇りもない幸せを感じたことはありません」⁸⁾とも符合している。これらの一方で、体験談の中には「焼けない人の家を見ると、うらやましい」「やけどされは、やけどされた人でなければわからない、言うに言われぬみじめな苦労をなめました」などのように、「幸福感」を感じる者が困難な者もいた。

4. 考察

本研究の結果より、戦災による逆境から立ち直ることができた理由として、「目的意識」「共感」「自己効力感」「意志継承」「幸福感」の5つの要因が抽出された(図2中央)。一方、先行研究⁹⁾において、日常生活で直面する困難や

ストレスなどの逆境から立ち直る力(レジリエンス)を構成する能力として、「感情調整力」「衝動調整力」「楽観力」「原因分析力」「共感力」「自己効力感」「リーチアウト力」が挙げられている(図2左)。また、先行研究¹⁰⁾では、復活力(レジリエンス)を「システム、企業、個人が極度の状況変化に直面したとき、基本的な目的と健全性を維持する能力」と定義している(図2右)。これらを比較すると、「目的意識(目的維持)」「共感(共感力)」「自己効力感」が共通していることから、これらの要因(能力)は逆境の種類・程度によらないものと考えられるが、「意志継承」と「幸福感」

は、戦災による逆境からの立ち直りに特有の理由と見なせる。以下では、このことについて考えてみる。

戦災による逆境(人命・家屋の喪失)は、当人の人生の目的を達成する上で、極めて困難な状況と言える。この困難を克服するには、当初の人生の目的を維持することができず、大幅な修正をせざるを得ない場合もあるであろう。このように考えると、「意志継承」は、他者(戦死者)が果たせなくなった人生の目的を、その人に代わって当人が引き継ぐこと、すなわち、当初の人生の目的を大幅に修正する決意をしたことと解釈できる。また、「幸福

表2 戦災による逆境から立ち直ることができた理由

理由 カテゴリー	逆境の区分			計
	人命・家屋の喪失	人命の喪失	家屋の喪失	
目的意識	<ul style="list-style-type: none"> ・この子を夫と思いがんばって幸せにしてやらなければと、気を取り直しました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・戦後の私は2人の子どもに生かされながら(女性、夫が殉職、『遺族』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・体の続く限り働き、子どものために生きぬいてきました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・子どもたち(4人)の将来のこと…を思う時、どんな苦しみを乗り越えても強く生きねば(女性、夫が戦死、『遺族』) ・この子達の成長にいちの望みを託して(女性、夫が戦死、『遺族』) ・子育てと商売のためとで無我夢中で働き続けたのです(女性、夫が戦死、『遺族』) ・私は21歳からきょうまで、1人の親しかいない2人の息子のため、45年間がんばり続けました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・ここで初めて夫の死を知り、きょうからは子ども達(2人)を私の手でりっぱに育てようと覚悟しました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・私は3人の子育てと生活のためむちゅうで働きました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・夫の残した農地を守るため、私は身を粉にして働きました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・どんなことがあっても、子どものために強く生きねばならぬと(女性、夫が戦病死、『空襲』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな事があってもこの子らのために強くがんばらなければ、と決意を固くした(女性、『空襲』) ・再建の道をまっすぐに歩みつけて今日まで来た私に、戦火で失われたものに対する心残りはあったにせよ、限らない勇気と、大きな生活力を与えてくれたもの……わが子です(女性、『空襲』) ・こんどは生きるために、きょう食う食料をみつければならなかった(男性、『空襲』) 	14人
共感	<ul style="list-style-type: none"> ・我一人にあらず、大勢の方々も私と同じように悲しんでいるだろうと自分を慰めるのでした(女性、夫が戦死、『遺族』) ・戦死の兵隊さんを偲んで、3人が5人分生きて、5人分働くため、私は、がんばらなくてはいけない、と自分に言い聞かせた(女性、空襲により娘・息子が死亡、『空襲』) ・同情を求めることは、むしろ無駄だと思った(男性、空襲により娘・息子が死亡、『空襲』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・親子共に死んでしまいたい思いでしたが、自分一人ではない、同じ思いの人も沢山いるのだ(女性、夫が戦死、『遺族』) ・隣の〇〇さんでも△△さんでも戦死した人がいたので、あれから今日まで、ずいぶん苦勞もしましたが、苦勞は私ばかりではありません(女性、夫が戦死、『遺族』) ・ふたりの子を道連れに死んでしまおう、と思ったことも…自分ばかりがみじめではない、まだたくさんの人が困っている、強く生きようと考え直した(女性、夫が戦病死、『空襲』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ市民にもっともつと情けの心がほしかった…なんの空襲のひがいのなかった人には、ほんとうにこんな苦勞はわかりません(女性、『空襲』) ・立ち上がらなくては、戦死したかたに申し訳ないと思い(女性、『空襲』) ・自分以上の最大の不幸にあわれた家庭は多数あることを聞き、深く同情すると同時に、今後いかなることをしても再起することを決心いたしました(男性、『空襲』) ・戦死された御遺族のことを思えば、我が家の犠牲くらいで泣いてはなるまいと心をとりなおい(女性、『空襲』) 	10人
自己効力感	<ul style="list-style-type: none"> ・昨日を思って悲しむより、明日に希望をもって、今日を力いっぱい生きようと思った(女性、喪失：空襲により娘・息子が死亡、『空襲』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・今度は、男になったつもりで(女性、夫が戦死、『遺族』) ・男同様に働き続け、何とか毎日を送ることもできました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・「人様に喜んでいただける仕事なんだ」と、自分に言い聞かせながら(女性、夫が戦死、『遺族』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争は終わっても、私の家の戦争はこれからだと、自分でむちを打ちながら…よし、男がいなくても、何年かかっても、いつかはできる(女性、『空襲』) ・自分に言い聞かせます。「与えられた環境下で、可能な限り最善を尽くせ」と(男性、『空襲』) 	6人
意志継承		<ul style="list-style-type: none"> ・夫が残っていた「子どもを頼む、家を守ってくれ」の一言。あの時のおもかけが心から消えることはありません(女性、夫が戦死、『遺族』) ・夫の最後の言葉「田畑は売ってもいい、子ども達には教育をしっかり頼む」を思う時、どんな苦しみを乗り越えても強く生きねば(女性、夫が戦死、『遺族』) ・何度、あなた(夫)の残してくださった『般若心経』におすがりしたことでしょう(女性、夫が戦死、『遺族』) ・2人の息子のため、45年間がんばり続けました。それは、死別した夫への一途な思いからでした(女性、夫が戦死、『遺族』) ・残された2人の子をりっぱに育てるという夫との約束を果たすためにも、がむしゃらに働かねばならないと覚悟しました(女性、夫が戦死、『遺族』) ・私はこの(兄からの)ことばに、…進学しようした夢を絶ち、農業を引き継ぐことを約束しました(男性、兄が戦死、『遺族』) 		6人
幸福感			<ul style="list-style-type: none"> ・家は焼けても、家族4人、無事だった私たちは本当に幸せだった(女性、『空襲』) ・肉親のだれもが傷を負わず…不幸中の幸いであつた(女性、『空襲』) ・戦火に焼失したものは大きくとも、肉親をだれも失っていない大きな安心感に、これらがほんとうの戦なのだ、しっかりしなくては(女性、『空襲』) ・無事だったことを喜び(女性、『空襲』) ・皆無事なることを喜び合いました(女性、『空襲』) ・無事なることを喜び合いました(男性、『空襲』) 	6人
その他			<ul style="list-style-type: none"> ・(終戦直後に餓子から疎開する女性がいたことに対して)最後まで餓子を捨てなかったのだと、大きな誇りをもっております(女性、『空襲』) ・人を助けることが自分を困らせることでしたから、困っている人がいても、実際に見て見ぬふりをしなければならなかった(女性、『空襲』) 	2人

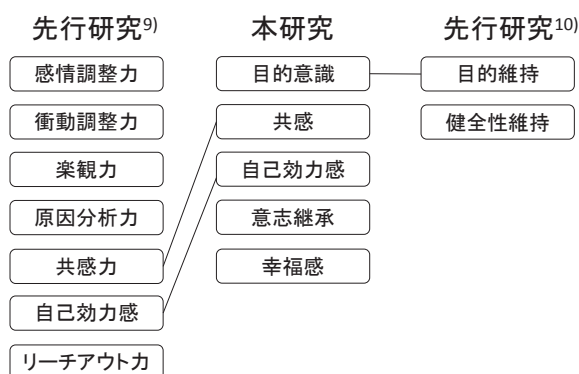


図2 逆境から立ち直るための要因(能力)

感」は、家屋を失ったとの事実に対して、財産(家屋)を「失った」と意味づけるより、むしろ財産よりも価値のある人命(自分・家族)が「残った」と意味づけていると見なせる。それゆえ、家屋を喪失したとの事実に対して「幸福感」を感じられる人は、その事実を受け入れるとともに、当初の人生の目的を大幅に修正する決心をしやすいのと推察される。

以上より、震災による逆境に直面した人は、まず、「目的意識」「意志継承」「幸福感」によって、人生の目的を維持・修正する。つぎに、その目的の達成に向けて、「共感」や「自己効力感」を発揮して、それぞれの逆境からの立ち直りに取り組む、といった流れが暫定的なモデルとして考えられる。

これを踏まえると、将来の災害による逆境(人命・家屋の突然の喪失)から立ち直るためには、まず、災害に襲われた後に人生の目的をいかに維持・修正できるかが重要であると言える。このとき、「意志継承」の観点からは、家族間で防災対策・行動について話し合うだけでなく、人生の目的についても話し合っておくことが有効と考えられる。また、「幸福感」の観点からは、人命を喪失しないための防災対策・行動を優先して、最悪でも家屋(財産)の喪失までにとどめることが有効と考えられる。さらに、逆境から立ち直るためには、日頃から「共感」と「自己効力感」の能力を高めておくことも必要と言える。このため、今後の防災学習(教育)では、各人の人生の目的について考えさせたり、「共感」や「自己効力感」を高める工夫を取り入れたりしていくことも必要と考える。

5. まとめ

太平洋戦争での逆境から個人がいかにして再起したのかを知るために、千葉県銚子市における空襲・戦死に関する体験談から、立ち直ることができた理由を抽出し、それらを逆境の区分(人命・家屋の喪失、人命の喪失、家屋の喪失)ごとに整理した。その結果、以下の知見が得られた。

- ・ 戦災の逆境から立ち直ることができた理由を大別すると、「目的意識」「共感」「自己効力感」「意志継承」「幸福感」の5つに分類された。
- ・ 5つの理由のうち、すべての逆境の区分に共通した理由は、「目的意識」「共感」「自己効力感」であった。
- ・ 「目的意識」に関しては、「自分のために」ではなく、「他者(子ども)のために」がほとんどを占めていた。
- ・ 「共感」に関しては、人命を喪失した者は「自分だけが逆境に置かれているわけではない」と考えるのに対して、

家屋を喪失した者は「自分より過酷な逆境に置かれている人がある」と考える傾向にあった。

- ・ 5つの理由のうち、特定の逆境の区分だけに見られた理由は「意志継承」と「幸福感」であり、「意志継承」は人命を喪失した者(戦死者の遺族)だけに見られ、「幸福感」は家屋を喪失(空襲により焼失)した者だけに見られた。

以上を踏まえて、震災による逆境から立ち直るまでの流れとして、逆境に直面した人は、まず、「目的意識」「意志継承」「幸福感」によって人生の目的を維持・修正し、つぎに、「共感」と「自己効力感」を発揮して逆境からの立ち直りに取り組み始める、との暫定モデルを提示した。これを踏まえて、災害による逆境から立ち直るためには、災害に襲われた後に人生の目的をいかに維持・修正できるかが重要であるとともに、日頃から「共感」と「自己効力感」の能力を高めておくことの必要性を指摘した。

最後に、今回の結論は、結果的に、千葉県銚子市の女性の体験談に基づくものが大半を占めているため、今後、他の地域や男性に対しても妥当であるのかを検証していく必要がある。また、今回は、内的要因に関する理由のみに焦点を絞ったが、外的要因も立ち直りに強く影響していると考えられるため(例えば、「子どものためにがんばれ、がんばれー父はいなくとも子は育つーそれに励まされて、がんばり続けました」「本家や親戚の援助を受けながら、一生懸命働きました」など)、今後の検討課題である。

謝辞

本研究に取り組むきっかけは、2014年8月、当時・千葉科学大学学生(千葉県銚子市出身)の山口祐司君から『市民の記録 銚子空襲』(文献4)の存在をご教示いただいたことによるものである。記して謝意を表す次第である。

参考文献

- 1) 室崎 益輝：災害に強い人間を育てる－防災教育における協働－，日本家庭科教育学会誌，第55巻，第3号，pp.141-149，2012。
- 2) 一之瀬俊也：銃後の社会史－戦死者と遺族－，吉川弘文館，p.2，2005。
- 3) 井上 亮：焦土からの再生－戦後復興はいかに成り得たか－，新潮社，p.2，2012。
- 4) 銚子市役所企画調整部市史編さん室 編：市民の記録 銚子空襲，678p，1974。
- 5) 銚子市遺族会 編：銚子市遺族会 四十周年記念誌，279p，1989。
- 6) 山内光哉・春木 豊：グラフィック学習心理学，サイエンス社，2001。
- 7) 佐藤翔輔・杉浦元亮・野内 類・邑本俊亮・阿部恒之・本多明生・岩崎雅宏・今村文彦：災害時の「生きる力」に関する探索的研究－東日本大震災の被災経験者の証言から－，地域安全学会論文集，No.23，pp.1-9，2014。
- 8) レベッカ・ソルニット：災害ユートピア，亜紀書房，pp.141-160，2010。
- 9) カレン・ライビッチ，アンドリュー・シャター：レジリエンスの教科書－逆境をはね返す世界最強トレーニング－，草思社，pp.33-54，2015。
- 10) アンドリュー・ゾリ：レジリエンス 復活力ーあらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か，ダイヤモンド社，p.10，2013。